

## PROGRAM

・弦楽四重奏曲 第17番より 第2楽章《セレナード》	F. J. ハイドン
・フルート・ソナタ B. W. V. 1020	J. S. バッハ(伝)
・月の光	C. ドビュッシー
・オーボエ・ソナタ op. 166	C. サン=サーンス
・オーボエ協奏曲 二短調より 第2楽章《ヴェニスの愛》	A. マルチエロ
・《シチリアーノ》 op. 78	G. フォーレ
・《シリニクス》	C. ドビュッシー
・動物の謝肉祭より《白鳥》	C. サン=サーンス
・《愛の悲しみ》, 《愛の喜び》	F. クライスラー

# 四季のコンサート 春

1988年4月12日(火) PM6:30

浜松市民会館 中ホール

主催: 浜松音楽友の会

日本を代表する一作曲家として多くの活躍が注目を集めています。  
日本を代表する一作曲家として多くの活躍が注目を集めています。  
1983年、オーボエの新作「可憐性を求めて」、前田謙男氏の脚本。  
1986年「ル・カスティガリ」、吉野義典氏の脚本。  
1988年「2度の愛」、吉野義典氏の脚本。  
1976年「7月の月日」、一国謙吉氏の脚本。  
1978年「中庭の春」、吉野義典氏の脚本。  
1980年「中庭の春」、吉野義典氏の脚本。  
1982年「7月の月日」、吉野義典氏の脚本。  
1971年「西の音楽」、吉野義典氏の脚本。  
1973年「西の音楽」、吉野義典氏の脚本。  
1976年「中庭の春」、吉野義典氏の脚本。  
1978年「中庭の春」、吉野義典氏の脚本。  
1980年「中庭の春」、吉野義典氏の脚本。  
1982年「中庭の春」、吉野義典氏の脚本。  
1984年「中庭の春」、吉野義典氏の脚本。  
1986年「中庭の春」、吉野義典氏の脚本。  
1988年「2度の愛」、吉野義典氏の脚本。

日本を代表する一作曲家として多くの活躍が注目を集めています。  
日本を代表する一作曲家として多くの活躍が注目を集めています。  
1978年「中庭の春」、吉野義典氏の脚本。  
1980年「中庭の春」、吉野義典氏の脚本。  
1982年「中庭の春」、吉野義典氏の脚本。  
1984年「中庭の春」、吉野義典氏の脚本。  
1986年「中庭の春」、吉野義典氏の脚本。  
1988年「2度の愛」、吉野義典氏の脚本。  
1976年「中庭の春」、吉野義典氏の脚本。  
1978年「中庭の春」、吉野義典氏の脚本。  
1980年「中庭の春」、吉野義典氏の脚本。  
1982年「中庭の春」、吉野義典氏の脚本。  
1984年「中庭の春」、吉野義典氏の脚本。  
1986年「中庭の春」、吉野義典氏の脚本。  
1988年「2度の愛」、吉野義典氏の脚本。

宮本文昭 (みやもと ひろあき)

篠崎史子 (しのざき ふみこ)

口アート



篠崎史子・宮本文昭  
豊かな語り

ハープ 篠崎史子  
オーボエ 宮本文昭

## オーボエ協奏曲 二短調より第2楽章<セレナード>

A・マルチェッロ (1684-1750)

この曲は、オーボエが哀調をおびたカンティレーナをかなでる緩徐楽章が、映画「ヴェニスの愛」(1970年イタリア)のタイトル・ミュージックに使われてから、広く知られるようになった。

原作者アレッサンドロ・マルチェッロは、ヴェネツィア貴族の出で、幼いうちから、学問や芸術に才を現した。

いろいろな楽器をひくだけでなく、歌もたくみで、その上絵筆をとり、詩を書き、哲学や数学にも造詣が深かった。彼はヴェネツィアの自分の家で、毎週自作品のコンサートを催したといわれている。その一部は、エテリオ・スティンフォリーコという名前で印刷出版されたが、今日まで伝わる作品は、実際に作曲された作品のごく一部にすぎないものと思われる。

協奏曲としてこの曲が世に甦る端緒となったのは、1923年にボンのR・フォルベルク社から出版されたV・R・ラウシュマン (Lauschmann) 校訂のエディションであった。ラウシュマンは原作そのものを校訂出版したのではなく、バッハのチェンバロ独奏用のアレンジから遡って、それをオーボエ協奏曲に復原する試みを行ったのである。彼の校訂版は、オーボエ、弦四部およびチェンバロの形をとっている。

## シチリアーノ

G・フォーレ (1845-1924)

「シチリアーノ」は今日では、フォーレの作品の中でも最も愛好されている曲の一つであり、様々な楽器にアレンジして演奏されている。

1893年に作曲され、シチリアーノに特有の付点リズムが、非常に効果的に使われている。旋法的な旋律の動きが繊細な変化を描き出しており、また、息の長い巧みな楽想も、この時期のフォーレの特色をよく表している。

## シリンクス

C・ドビュッシー (1862-1918)

原曲は、フルートのための非常に小さな独奏曲である。もともとは「バーンの笛」と題され、ガブリエル・ムーレ (Gabriel Mourey) の劇「プシケ Psyche」のための付随音楽として1912年に書かれた。

35小節で構成されている非常に短い曲であるが、フルートという楽器の表現技倣を最大限に發揮した曲であり、演奏上、高度の技法を要する。同時にドビュッシーの抒情的な幻想豊かな旋律が、フルートの単旋律の中に完璧に一体となっている。牧歌的な幻想的な旋律が、全曲を通して優美に響きわたる。

## 動物の謝肉祭より<白鳥>

C・サン=サーンス (1835-1921)

この作品は、作曲者51歳の1886年に、オーストリアの小都市クルティムで作曲された。サン=サーンスという名前を知らない人々にも、広く親しまれている曲である。

さまざまな動物の生態をユーモラスに、またある場合には、皮肉に描き出した、誰にでも親しみやすい組曲「動物の謝肉祭」の第13曲。

## <愛の悲しみ> , <愛の喜び>

F・クライスラー (1875-1962)

「愛の喜び」と対をなすもので、ウィーンの古い舞踏歌の様式感を持たせたワルツ。感傷的な旋律で始まり、しだいに熱を帯びて情熱的な副次旋律へ入ってゆく。いずれも1910年「古いウィーンの舞踏歌」としてショット社より刊行される。

やはりウィーンの古い舞踏家の様式を模した作品。4分の3拍子の快活なワルツで始まる中間に速度をゆるめたグラツィオーゾの哀愁を帯びた旋律をはさんでいる。喜びにわき立つような句がウィーン風のワルツのリズムに乗って出され、改めて、冒頭の快活なワルツで終る。

---

## オーボエ (チャルメラの西洋版)

オーボエというのは乱暴な表現をすれば“支那そば屋のチャルメラ”的西洋版。

優しい音色の聾笛と思っていただければよいのです。

またオーケストラが演奏直前の音合わせで、まずアーチの音を出すのはオーボエの役目なのです。

## ハープ (楽器の女王)

ハープは古代エジプト時代から使われた琴を改良した楽器で、その姿形の美しいことから宮廷で愛好され、“楽器の女王”とも言われています。